

わたしの理想の晩年は松浦へ
帰り「晴耕雨読」をすることであ

った。職業柄、本は書齋に山ほど
積んである。「積読」とは書物
を買って積んでおくだけで読ま
ないことをいう。わたしは積読
ではない。積読だけではもった
いない。その時代その時代に読
んだ本ばかりである。本の題名
を読んだだけで内容がわかる。

仕事関係で読まざるを得なく
て読んだ本もある。山本周五郎
や松本清張の全集はもちろんあ

る。高木彬光の「成吉思汗の秘
密」もある。チングスハンは源
義経であったという説である。

高校時代の夏休み、わたしは夢
中になってこの本を読んだ。そ
れがまだ残っていて書齋にあ
る。荒唐無稽であるとは知りつ
つも、興味を覚えたのは確かだ

理想とは違ふ晩年

ある。「裏切りに泣く義経
地を蹴るのだ おまえはチング
スハンののだ」。こんなキャッ
チコピーを考えた。山本周五郎
や松本清張は、その小説も面白
いが2人の複雑な一代記が心を
打つ。それらをすべて松浦で読
み返して晩年を過ごしたい。

しかし、もう、晩年である。松
浦での青春時代のわたしの計画
では、この年では世田谷の成城
に大邸宅を構えているはずであ
った。もちろん、妻は和子姉さ
んである。映画も2、3本は撮っ
ていて、世界に配給される大監
督になっていたはずであった。

しと生まれ故郷松浦とはいまの
距離感がいいのかもしれない。
平成12(2000)年、わた
しは平戸市となった旧大島村の
小浜賢一村長の依頼で大島の歌
を作った。鳥羽一郎氏が歌って
くれた。「長崎の果て西の果て
情け咲く港町 連絡船の賑わ

計画通りにいく人生などあるは
ずもない。いや、計画通りに人生
を過ごした人もいるのかもしれ
ない。人の人生を台無しにして
である。ただ、いま松浦に帰っ
ても迷惑を掛けるだけかもしれ
ない。家も墓もない。女房子供
も承知はすまい。やはり、わた

いは 嫁ぐ人 祝う人 訪ねて
すぐに懐かしくなる大島 大島
は心という字に似てる島」。大
島は平戸港からフェリーですぐ
である。「長崎の果て西の果て
情けが溢れる港町 連絡船の
賑わいは 旅の人 島言葉 歩
けばすぐに懐かしくなる大島

大島は心という字に似てる島」。
確かに大島は心という字に似て
る島である。レコーディングに
は小浜村長も付き合ってくれ
た。鳥羽一郎氏とスタジオで3
人で撮った写真が懐かしい。
なにか連絡したいことがあつ
て小浜村長の家へ電話したこと
がある。夜であった。しばらく
時間を経て、電話口に小浜村長
の声がした。「こんな格好で失
礼します」。風呂に入っていた
のである。ドリフのギャグでは
ない。事実である。しかし、面
白過ぎる事実は「うそだあ」と
人は笑ってしまう。「事実は小
説より奇なり」という言葉もあ
る。小浜村長の大島を思う気持
ちには感動した。